

研究活動報告

日本地理学会2000年度秋季学術大会

日本地理学会2000年度秋季学術大会が2000年10月7～10日、鹿児島大学にて開催された。「海と陸のはざまでの「場所の力」 南九州と南の島々からの視座」と題されたシンポジウムの他、口頭82件、ポスター（コンピュータ）22件の発表が行われた。人口関連分野の報告について以下に紹介する。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| 「奄美における人口移動と「場所の力」 | 田島康弘（鹿児島大学） |
| 「首都圏周辺都市藤沢市の高齢者分布と地域特性」 | 畠山輝雄（日本大学・院） |
| 「神岡の高齢者はなぜ移動しないのか」 | 田原裕子（東京大学）、神谷浩夫（金沢大学） |
| 「DHS データを用いた人口移動分析」 | 井上 孝（青山学院大学） |
| 「東京大都市圏における通勤圏の変容」 | 田口 淳（専修大学・院） |
| 「韓国の大邱市における保育サービス施設の利用」 | 金 銀淑（金沢大学・院） |
| 「過疎地域における高齢者の介護サービス供給 - 岐阜県神岡町の事例」 | 柴田紀子（富山医療福祉専門学校） |
| 「近世三河国田原藩における戸口数データの動態と城下町プランへの影響」 | 林 哲志（愛知県立福江高校）
(江崎雄治記) |

日本人類学会第54回大会、およびサテライトシンポジウム

2000年11月3～5日、東京大学本郷キャンパス、山上会館において日本人類学会第54回大会が開催された。また、これに合わせて、4日にはプレナリーシンポジウム、5日にはサテライトシンポジウムが開催された。本学会の研究分野が多岐に渡っていることを反映して、大会ではいくつかの分科会ごとにシンポジウムを組織するとともに、一般口演もテーマによって専門分野に分類され報告が行われた。

- シンポジウム（進化人類学分科会）「共存の維持と破綻 ヒト科の多様性と種間関係をいかに理解するか」、組織者：黒田末壽（滋賀県立大）
- シンポジウム（キネシオロジー分科会）「脊柱」、組織者：松村秋芳（防衛医大）・史常德（獨協医大）、討論者：服部恒明（茨城大）・馬場悠男（国立科学博物館）
- シンポジウム（ヘルス・サイエンス分科会）「老化と運動機構 ヘルス・サイエンスの視点から」、組織者：岡田守彦（筑波大）、司会：植竹照雄（農工大）
- シンポジウム IV 「色覚遺伝子研究の展望：脊椎動物としてのヒト」、組織者：河村正二（東京大）

一般口演の分類は、(1)遺伝、(2)生態、(3)形態・古人骨、(4)先史・古人骨、(5)成長・老化、(6)生体機構、(7)先史・古人骨、(8)形態とされていた。このほかポスターセッション（3、4日）も行われている。各フロアでは活気に満ちた討論が行われていたが、とくに大会会期中に高森・上高森旧石器遺跡

における石器捏造事件が発覚・報道され、関係者を中心に、ロビーはこの話題で持ちきりであった。

プレナリーシンポジウム（4日）では、平井百樹東京大学教授、植田信太郎同助教授を組織者として「アジアの人類学」と題して、金鋒氏（中国科学院遺伝学研究所）、Francisco A. Datar氏（フィリピン大学人類学科）、Teuku Jacob氏（ガジャマダ大学医学部）の三氏による報告討論が行われた。

さらに、5日には安田講堂において日本人類学会サテライトシンポジウム『日本列島の人口潮流 - ヒトはいかに生まれ死んできたのか -』が公開、開催された。司会、報告者は以下のとおりである。

開会挨拶：木村 賛（日本人類学会会長、東京大学）

司会：大塚柳太郎（東京大学）

- ・縄文からみた弥生の人口 - 小山修三（国立民族学博物館）
- ・縄文時代の出生率と寿命 - 骨からの推定 - 五十嵐由里子（日本大学松戸歯学部）
- ・骨から見た老いと病 - 鈴木隆雄（東京都老人総合研究所）
- ・人生40年の世界：江戸時代の出生と死亡 - 鬼頭 宏（上智大学経済学部）
- ・到達点としての少子高齢社会 - 金子隆一（国立社会保障・人口問題研究所）

これは人類学的視点から人口の歴史的展開をテーマとするシンポジウムであり、日本列島の縄文時代から21世紀に至る巨視的潮流、とりわけそこに生きたヒトの生き様の変遷について、それぞれの時代・テーマの専門家による報告と、フロアを含めての討論が行われた。人類学研究における人口分野の知見の必要性和、人口研究における人類生態学的視点の重要性を再確認させる内容であった。

（金子隆一記）

日本地域学会第37回（2000年）年次大会

日本地域学会第37回（2000年）年次大会は、2000年11月3日（金）・4日（土）、東北学院大学土樋キャンパスにおいて開催され、研究報告、シンポジウム等が行われた。

研究報告のなかで人口学的観点から特に興味深いテーマを扱ったものとしては、次の5報告があげられる。

「少子高齢化の地域経済に及ぼす影響：名古屋市のケース」

信國眞載・徳永澄憲・上山仁恵（名古屋市立大）

「オッズ比分解法の問題点と解決への展望」

樋口洋一郎（東京工業大）

「子育てに適した地域システム実現のための計画策定への参加手法に関する基礎的研究」

寿崎かすみ（三菱総研）・熊田禎宣（千葉商科大）

「戦後日本の人口移動に対する分配所得格差と個人所得格差の説明力（1955 - 1995）」

伊藤 薫（岐阜聖徳学園大）

「商業地の活性化方策が都市活動立地と人口分布に及ぼす影響」 金広文・林豪人（東京工業大）

信國氏らの研究は、経済モデル、人口サブモデル、財政サブモデルから成る「NCU名古屋2000モデル」によって少子高齢化の経済学的な影響を2010年までの期間について予測したものである。樋口氏が問題点を整理したオッズ比分解法は、国内人口移動との関係が深い。寿崎氏と熊田氏の研究では、保育園を利用する父母および保育園園長を対象とした調査が行われており、地方自治体が建造物とサー